# ∡3.75 度の近代
## 韓国・景福宮前の建築交代を読む

谷川 竜一
京都大学地域研究統合情報センター・助教

### 1．めまぐるしく交替する建物

本発表は韓国の首都ソウルのいくつかの建造物を対象にしていますが、それらをめぐる一つの疑問からお話したいと思います（図 1）。

1910 年に韓国併合を行った日本は、その後、朝鮮王朝の正宮殿である景福宮に、朝鮮支配のための最高官衙である朝鮮総督府庁舎の建設を開始しました。庁舎は、王宮と王宮の正門である光化門の間に割り込むように建設されました。そして庁舎の前面にあった光化門は移築され、最終的には朝鮮戦争で破壊されてしまいます。総督府庁舎は韓国の独立後も米軍や韓国政府の官衙として利用されたのですが、光化門は 1960 年代に再度庁舎の前に復元されました。しかしその状態も長くはなく、1980 年代後半から博物館となっていた朝鮮総督府庁舎の取り壊し計画が進み、1995 年には庁舎の撤去が始まります。それは景福宮の整備計画とも連動しており、庁舎の撤去の後は、驚くべきことに、既存の復元された光化門を壊し、光化門を再復元することになりました。そして 2010 年 8 月 15 日に、その光化門は完成し、李明博大統領が通り初めを行ったのです。

このように、100 年間の間にめまぐるしく建物が変わり、そのたびごとに様々なセレモニーの場となったわけですが、都市内の極めて狭いエリアの中で、新築、移築、復元、破壊がこれほど凝縮して起った背景には、いかなる理由があるのでしょうか。

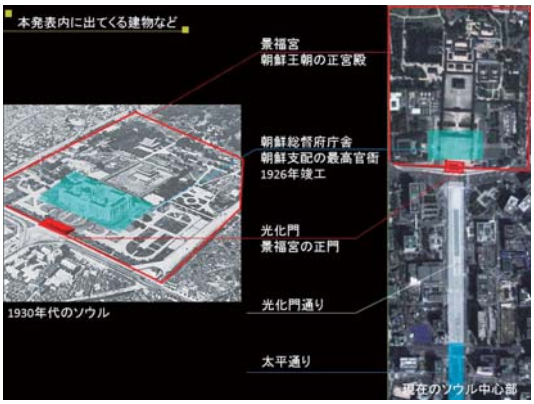


図 1

この建物の交替に関して、王宮内の庁舎の建設は日本が王朝の権威をのっとるためであったとか、あるいはその後の庁舎の撤去は、庁舎を支配のシンボルとして撤去することで、国民統合やナショナリズムを強化するための植民地支配の克服セレモニーだったという解釈や理由が、現在も広く人口に膾炙しています。

例えば朝鮮総督府庁舎の解体・撤去に関しては、当時の金泳三大統領は、撤去は「間違った過去の清算と新しい出発の意味」があり、「我が民族の感情や矜持、自尊心のために必要な作業」という風に述べていますし、2010 年の光化門の復元に関しては、「再び開いた『光の門』我々が日本よりもっと輝くべき理由」という題名のコメントが見られるなど、それぞれの建設や破壊が、植民地主義に対する批判とその克服、ナショナリズムの発露の場として説明されています[1]。（図 2）

図 2.「145 年前の偉業 姿そのままに ..」
『韓国日報』2010 年 8 月 16 日

こうした「言説」に関する研究は近年数を増やしていますが、本発表では建物や空間のカタチや配置という点に注目して、非文字資料を扱うが故の面白さ、そこから考える少し違うソウル像を探ってみたいと思います。私は近代の建築の歴史研究

1　白 孝卿「近代植民地文化遺産の保存に関する研究：旧朝鮮総督府撤去過程を中心に」『日本建築学会計画系論文集 77（671）』日本建築学会、2012 年、pp.227-234。『ソウル新聞』2010 年 8 月 16 日。

が専門であり、とりわけ近現代日本とアジアの関係に興味を持っております。建築を眺めて批評するだけでなく、建築に期待できること、建築を通してできることも同時に少し考えてみたいとおもいます。

## 2. 20 世紀初頭のソウルの道路

まず 20 世紀初頭のソウルの地図を御覧ください。20 世紀初頭までの光化門通りには、景福宮を背景にして政府の省庁官衙である六曹が並んでいたことがわかります（図 3）。つまり、宮殿と光化門通りは国家運営の中枢を担う空間だったのですが、光化門通りは鍾路通りで東に折れていて、宮殿は都市の遙か遠くから道路に沿って見通すことはできませんでした。記録にある道路の広さも、例えば 1426 年の火災後の道路敷設計画では、大路、中路、小路に分け、それぞれ 17 メートル、5 メートル、3 メートルの幅が持たされたと考えられ、光化門前や鍾路通りなどの主要街路は広い通りでしたが、その他の通りは大変狭い通りで、見通しが利くところは、限られていました。

こうした折れ曲がった道路が導入された理由は、いくつか考えられます。例えば、近年の研究で指摘されていることは、起伏のある地形に沿って道路が造られた点、とりわけ、水の流れに沿って細かな道路網が発達したことなどです。市内の北西から景福宮の西側を南下し、鍾路の南側で東に折れて流れる清渓川は、ソウルの中心部を流れる最も大きな川ですが、この川に並行して先の道路が発達していったことも考えられます。また、14 世紀の朝鮮王朝建国時に重視された風水思想によって街路が直線にならなかったという風にも言われています。他にも、当時の都市設計において最も重視されたのは、宮殿を南面させることと、王族の先祖を祀る宗廟、祭祀施設である社稷壇の位置

図 3

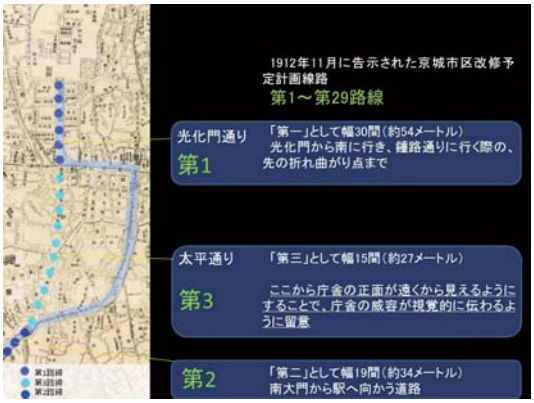


図 4

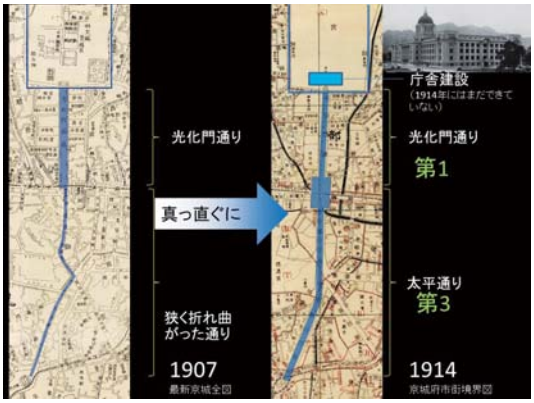


図 5

の決定であったと伝えられ（『太祖実録』）、こうした道路のカタチに関しては、これらの複合要因によるものと考えられ、いまだはっきりしないというのが現在の状況です。

さて、1910 年の併合以後、この光化門のすぐ北側の宮殿内に、日本人は総督府庁舎の建設計画を開始し、庁舎は 1926 年に竣工しました。また、1912 年 11 月に告示された京城市区改修予定計画線路では、光化門から南に行き、鍾路通りに行く際の、先の折れ曲がり点―当時は黄土峴広場―までの道路を「第一」として幅 30 間（約 54 メートル）として、次に南大門から駅へ向かう道路を「第二」として幅 19 間（約 34 メートル）として、そして先の折れ曲がったところから南大門に向かって、「第一」と「第二」の道路を繋げる道路を「第三」として幅 15 間（約 27 メートル）として、順次計画・整備が進みました（図 4）。しかも道路の両サイドには歩道がつけられるなど、「近代的」な道路の敷設が進められました[2]。肝心の庁舎の設置場所にあたっては、第三の道路である太平通りから、庁舎のファサードが遠くから見えるようにすることで、庁舎の威容が視覚的に伝わるように留意したという記録があります（図 5）。

2 『朝鮮土木事業誌』朝鮮総督府、1937 年。

ところで、併合当初の道路の整備事業を見ると、朝鮮王朝時代の道路網を引き継いで整備されたことが記されています。そして1912年になって先の第一の道路から始まり、第二十九までの道路整備を、日本は開始しました。つまり、日本は植民地支配を開始した直後は既存の道路の補修程度に留めていましたが、計画に沿って新しい道路網を敷設いったわけです。そして特に重要なことは、道路の整備と足並みを合わせて庁舎が建設されていったことであり、その庁舎は、前面の光化門通り・太平通りの向きに影響される形で、その方向を決めたわけです。

## 3. 建物と道路の方向

ここまでのことを、建物の方向に着目して分析してみたいと思います（図6）。まず20世紀初頭の景福宮の図を見ると、景福宮の宮殿建築群は、一つの方向性、つまり空間軸をもって建ち並んでいたことがわかります。しかしその空間軸は、宮殿前の光化門通りの方向とは完全に一致していません。光化門通りは、門のすぐ前では景福宮の空間軸方向と合ってはいるのですが、少し南に行くとゆるやかにカーブしているのです。景福宮の空間軸に揃えるということを、方向に関する一つのルールとして考えれば、そのルールは都市全域に適応されるものではなく、宮殿内に閉じたルールだったということです。そこには、天子南面といった考え方や、左に廟を置き、右に社稷を配置する左廟右社という考え、あるいは風水など、当時の都市設計原理の即した考え方はもちろんありますが、道路や街区構成などの都市空間の構造を利用して、宮殿の視覚的象徴性を都市全体として高めようとした意図は感じられません。

しかし、日本によって宮殿内に建設された庁舎は、光化門通りの先に敷設・拡幅された太平通りの方向に正面を向くように配置されました。つまり、道路を活かして、より遠くから見通せ、さらに見通したときに庁舎が正面を向けて象徴的に見えるように意図されているのです。こうした手法は、バロック的都市建設の手法として19世紀を通して欧米で洗練されてきたものであり、日本が近代化の過程の中で学んだ上で、自身の植民地都市であるソウルにおいて部分的に実践した事例です（図7）。

図6

図7

ですが、ここで注意しておきたいことは、庁舎が景福宮の正面に、まるで道路側からは宮殿建築群を見せないように建てられているということです。そのため、庁舎は景福宮の存在を完全に無視し、前面の光化門通りやその先の太平通りにのみ配慮してその配置を決めたのだという言説が、現在一般的な通説となっています。もちろん庁舎の巨大さを見れば、背後の宮殿建築は遮断された空間と感じてしまうのは無理もないことです。しかし果たしてそれは本当なのでしょうか。

## 4. 軸線の交差とその連鎖

ここで地図に、景福宮の宮殿建築群が作り出す空間軸と、前面光化門通り・太平通りの空間軸を書き込んでみます（図8）。すると、それら2本の線は角度の差にして約3.75度ずれており、それらが庁舎のシンボルであるドーム部分で交差していることがわかります。ドームという場所で二つの軸線が交差するという、極めて空間的な一致には、明らかに建築家たちの何らかの意図が入り込んでいるはずです。

そこで記録を調べると、この理由についての記載が一言だけ残されていました。資料には、背後の景福宮と庁舎が「没交渉」となるのを避けるた

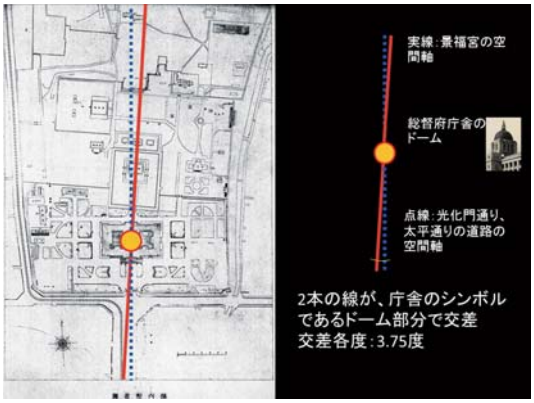


図８

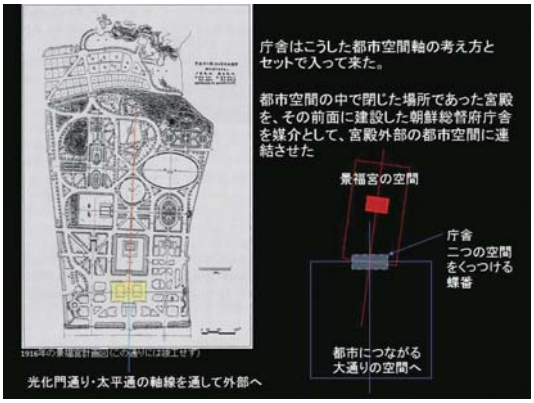


図 10

図９

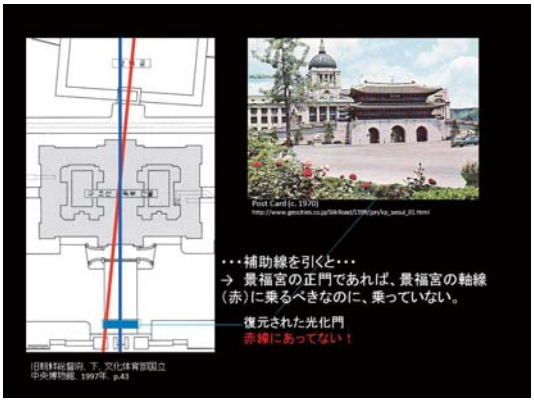


図 11

めだったと記されています[3]。つまり、庁舎の威容を表現するために、庁舎の正面を道路の空間軸と合わせた一方で、背後の景福宮の宮殿空間と無関係となることを、建築家たちは嫌がったのです（図9）。

建築家たちは、景福宮の空間軸を、庁舎のシンボルであるドームの中心に一致させることで、道路からだけでなく、景福宮から見たときも庁舎が視覚的に少しでも収まりがよいように図ったわけです。言い換えれば、庁舎は、前面の光化門通り・太平通りの空間と、背後の景福宮の宮殿空間をつなぐ、空間同士の蝶番の役割が与えられていたのです。

以上から、庁舎建設において、建築家たちが景福宮を軽く扱ったり、少なくとも無視したりしたわけではないことがわかります[4]。（図 10）

ところで、こうして庁舎と一緒に持ち込まれた軸線という考え方の余波は、韓国の独立後にも続くことになりました。庁舎の建設の際にその場所から失われた景福宮の正門である光化門が、1960年代に庁舎前に復元されましたが、その配置がオリジナルのものとは異なっていたのです。正確な復元をするならば、光化門の配置は背後の景福宮の空間軸に従わせるべきでしたが、前面の光化門通りと庁舎の空間軸に従っているのです（図 11）。

この光化門の復元に対して、ポジティブなものとして捉えている意見は多くありました。例えば門が鉄筋コンクリートで復元され、伝統的な建築だとは一般的には言いがたいにもかかわらず、むしろ構造材としての強さを讃える論調で報道されていたりします。ズレのような空間的ないしは抽象的な差異よりも、具体的な力強い鉄筋コンクリートの門に、科学技術に裏打ちされた建築技術の新しさ、あるいは門の永続性を見ようというわけです。こうした中で、1960 年代に復元を担当した建築家たちは、当然 3.75 度のズレに気づいていたはずですし、知った上で判断をしたと考えられます。つまり、ズレが据え置かれたことは、光化門の前の光化門通り・太平通りや、門の後ろの庁舎と、視覚的に収まりが良いように韓国人建築家たちによって調整された、言い換えれば、周辺環境の存在に新しい光化門が引きずられた結果であると推測されます。

3　富士岡重一「新廳舎の設計概要」、『朝鮮と建築』第５輯第５号、朝鮮建築会、1926 年。

4　もちろん、その手法の適用方法に対する批判や、その手法が本当の意味で成功だったかどうかは別問題であり、加えて今日的な視点に立てば大きな問題があったことは間違いない。

そして1980年代になると、ソウル市史編纂委員会によって、「1926年の庁舎建設から数えて40年後の1966年に再び元の位置に復元された」と歴史書で記されるなど、門は大きな違和感なくソウルの歴史の一部として定着しました[5]。復元された門の軸線のズレが大きな問題とならなかったのは、おそらく門の後ろに庁舎があったために、門は道路側からしか見えなかったことに加え、光化門が配置として庁舎と整合性を持っていたために、オリジナルの場所とは異なる場所に建てられたことに対する違和感を、人々が感じなかったのではないかとも考えられます。

さらに面白いことに、軸線の余波はこれだけに留まりませんでした（図12）。1990年代に庁舎が撤去されると、今度は残された光化門が景福宮の空間軸に合わず、3.75度の軸線のズレが顕在化したこともあって、景福宮全体の復元と連動してその空間軸に従った新たな光化門が、最初に述べたように再復元されることとなったのです。

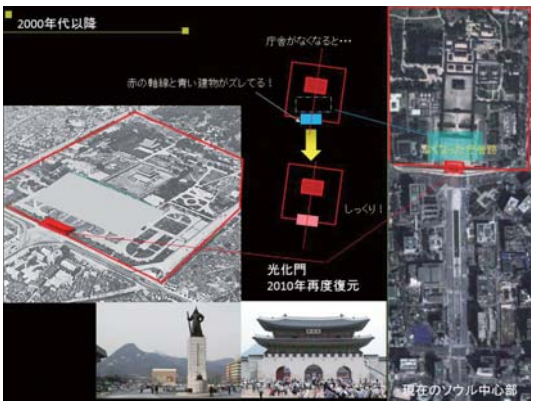


図12

## 5. 結論

さて、最初に景福宮前の建物交代劇の原因を問いましたが、これに対する結論としては次のようなことが言えると思います。朝鮮総督府庁舎は、近代的な空間軸という概念をソウルに持ち込んだ結果、景福宮の空間をその外部空間であるソウルの都市構造と結びつける必要を生み出してしまいました。そのため、景福宮の空間軸と光化門通り・太平通りの空間軸の不一致が「ズレ」として認識され、以降はずっとその処理に翻弄されることになったのです。景福宮前の建物の交代劇の黒幕は、植民地化・「近代化」の過程で持ち込まれた空間軸という思考であったと言えるのではないでしょうか。

では、軸線のズレに対しての一連のこの操作を、ソウルという都市を造っていくための試行錯誤のくり返し、一つのエスキスとして大きく見ると一体どのような意味があるのでしょうか。これに対して次のようなことが考えられます。

まず、近代的な建築・都市の設計技法の適用の中で、ソウルに用いられた軸線を調整して空間を繋げていくという方法は、そもそも植民地政府の庁舎の「威容」を表現するためだったということです。そうだとすれば、庁舎の撤去後は、軸線が再び合わなくなってしまったことは、その逆のことを意味しているのではないでしょうか。つまり、庁舎に変わって建てられた光化門や景福宮を「威容」として捉える必要がなくなったというわけです。

庁舎は植民地政府もそうだし、独立後のある時期までは軍事政権が用いた、いわば政治的機能を持つものでした。そこに権力者がいたわけです。しかし2010年の光化門の通り初めの際に、李明博大統領他は、景福宮の外部の道路側から宮殿内部に向けて歩いて入りました。権力者の登場であれば、内部の宮殿から外部へ向けて出て行くはずであり、事実朝鮮王朝時代は、王宮からの行列は人々の注目の的であったわけです。それがセレモニーとして逆転してしまった。いわば権力の場が開かれてしまい、モニュメントと化してしまったと言えるかもしれません（図13）。

同じことは道路についても言えます。光化門通り・太平通りは、例えば1952年の都市計画街路計画において幅100メートルとすることなどが定められるなど、朝鮮王朝や植民地時代より大幅に広げられており、噴水が設置され、前述のような大統領のセレモニーや演説が行われたり、知名度の高い英雄の像が建ち並んだりして、少しずつ広場化しつつあります。

以上のように、景福宮から光化門通りに至る場は、20世紀における空間軸に配慮した宮殿前面の光化門通りの拡幅・延伸、朝鮮総督府庁舎の建設

図13. 通り初めをする李明博大統領ら。2010年8月15日。『朝鮮日報』2010年8月16日

5　ソウル市史編纂委員会『ソウルの街路名沿革』ソウル市1986年。

という「近代的」な都市改変を経て、支配者の権威が示される場所というよりは、ソウルの人々のための場へと少しずつ変化していったと言えるでしょう。

## 6. もう一度軸線へ

ここまで述べてきたことは、カタチのズレから読み解ける一つのポジティブな意味と言えます。一方で、庁舎の撤去と光化門の再々建設を通して、バロック的な都市計画思想の下で関連付けされていた二つの軸線を、切断してしまったことの意味も、実は少しよく考えてみた方が良いテーマだと思っています。つまり私には、撤去を通して示された日本の植民地主義批判が、逆に景福宮を頂点とする「一つ」の朝鮮というナショナリズムに反転してしまっているかもしれないという懸念があります。ただし、これは日本人の私がするべき批判ではないかもしれず、これとは別の方向から、建築家による軸線処理のことをもう一度考えたいとおもいます。

ここで少し話が飛びますが、一昨年、朝鮮総督府庁舎建設に関する新資料が見つかりました。本発表で述べた朝鮮総督府庁舎の設計は、これまで主設計者と考えられていたドイツ人・デ・ラランデではない可能性が高まり、さらに彼が設計したとみられる別の簡易平面図が明らかになりました。それを見ると、庁舎は景福宮のゲートのような機能が期待されており、前面の光化門通り・太平通りの空間軸と背後の景福宮の空間軸の調和がより図られています（図 14）。このカタチで庁舎が建っていたとすれば、また違った日韓の歴史が生まれていたかもしれないと私は時折夢想しますが、現実は異なり、先に述べたように建築家たちは空間軸を利用して庁舎の威容を表現しようとしたわけです。その傲慢さは十分批判されるべきですし、私も同意します。

図 14.「ゲオルグ・デ・ラランデ 京城都市構想図」（倉富家所蔵）

ですが私がここで是非とも注目しておきたいことは、本論で見たように植民地支配を体現した庁舎といえども、景福宮という既存の都市空間のコンテクストを全く無視できなかったということです。建築家たちは、無視はおろか、逆に何らかの空間的な「交渉」を求めてさえいた。それは独立後の朴正熙政権下で光化門を復元した韓国人の建築家たちも同様だと思います。彼らは周辺を無視できなかった。設計という営みの中に、このような既存の空間的コンテクストを無視しない、いわば異なるものとの調和の姿勢や力があることを、私たちは―建築家であるかないかを問わず―、意識しておくべきだと思います。

それによって「威容を表現したから悪い」という単純な植民地主義批判や、「建築家たちは権力者たちの言いなりであり、植民地支配には関係ない」といった逆向きの考えから、一歩踏み出して考えることができるのではないでしょうか。例えば、軸線処理をする上で、デ・ラランデの目指した方向を徹底させる解答もありえたわけです。換言すれば、設計が持つ調和の力を、なぜ植民地主義や狭隘なナショナリズムに安易に献げてしまったのか、なぜそれを守れなかったのか、という問いを立てた方が建設的ではないでしょうか。それは、日本人・韓国人を問わない公平な議論の地平であるように思いますし、文字資料ベースの言説分析などとは違う、非文字資料の読み解きとしても、適しているように思います。